

障害児のきょうだいと健常児の兄弟の違い

— 障害児に対する見方との関連 —

伊藤 美咲・栗田 季佳

Comparison between siblings of people with and without disabilities: Relation of stigma of people with disabilities

Misaki ITO and Tokika KURITA

要 約

障害児のきょうだいは、健常児の兄弟を持つ子どもにはない特有の悩みを持つことが指摘されている。しかし、国内において、障害児・者のきょうだいであることによる体験や影響に関する研究は少ない。また、きょうだいに関する研究の中でも、健常児の兄弟と障害児のきょうだいを比較している研究はほとんど見当たらない。そこで本研究では、障害児と健常児の兄弟にインタビューを行い、障害児のきょうだいである特有の実態を検討した。インタビューの結果、同胞のことを友達へ話すことへのためらいや、将来に及ぼすきょうだいの影響等が特有の実態として挙がってきた。また、健常児の障害児・きょうだいに対する見方は、「積極的拒絶」「消極的拒絶」「対等」の3種類に分けられた。今後の課題として、環境の大切さ・教育現場での支援の重要性が示唆された。

I 問題と目的

家庭内に年齢の近い複数の子どもがいることは、友人関係とはまた異なる子ども同士の関係を築く。年長者は年少者へ世話をやいたり、年少者は年長者から学習したり競争心をもったり、また兄弟同士は年代に共通した会話や遊び、外では話せない悩みを共有することもある。兄弟の存在は、性格形成や社会性の発達に大きく影響を与えるが(武田, 1995)、兄弟姉妹に障害児がいるか否かで、その影響は大きく異なる。

障害児のいるきょうだい(以下、きょうだい)は、健常児の兄弟を持つ子どもにはない特有の悩みを持つと言われている(三原, 2005)。日本において障害児のきょうだいがもつ悩みを指摘する研究として、例えば、川上(2013)は自閉症児のきょうだいにインタビューを行った。きょうだいは、自閉症児の見かけが健常児と変わらないため、健常児と同じようにできることへの期待と「固有の世界(興味、認知、行動の特徴を踏まえた理解)」の認識との間で、「自閉症児が持っている世界の理解しづらさ」や「縮まらない距離」を感じていることを述べた。きょうだいは、日常的な関わり

から、身近にいる自閉症児の特徴を理解し、どのような関係を築くのかに悩んでいることが伺える。また、きょうだいは健常なきょうだいにばかり期待をかけられていた(加瀬, 2008)。障害児の親はきょうだいに對して「きょうだいとして手助けをしてくれる」「障害を理解してくれている」等、「育てやすい良い子」であることに、嬉しさを感じている(金泉ら, 2015)。一方で、きょうだいは障害児への介護をしている母親と遊べない、付き添い入院中の母親の不在による寂しさ等様々なことを我慢し続けている(小宮山・宮谷・小出・入江・鈴木・松本, 2008)。きょうだいは子どもながらも自らの感情や欲求を我慢し、溜め込むことに慣れ、過度のストレス・悩み・不満を抱えこんでいると考えられる。

このようなきょうだいの抱える悩みは一定ではなく、発達的に変化することを長澤(2009)は指摘する。きょうだいは、小学生になると、同胞に対する葛藤の段階に入り、他児との比較や自分との行動上の違いに気づくことによって、友達に同胞について話すことへのためらいの気持ちを持つ。中学生になると、同胞の受け入れの努力を試みるようになる。しかし、障害者へのから

かいの憤りを感じやるせなさを抱く。高校生になると同胞に対する葛藤のピークを迎え、同胞の障害を隠すことへの自己嫌悪や障害者を悪く言う友人に同調してしまい、同胞のことを話せない後ろめたさを抱く。大学生になると同胞のことを話せる環境や存在等の条件が揃うことで話ができるようになり、気持ちの整理ができていく。

このような、障害児のきょうだいの経験を、健常児の兄弟は同様にするだろうか？おそらく両者は大きく異なり、障害児のきょうだいは特有の悩みをもっていると考えられる。これまで述べたように、障害児の独特の認識に対する戸惑い、介助の負担、障害者への差別等、障害者が社会におかれている状況が、兄弟よりきょうだいにあらわれるだろう。

しかし、国内のきょうだいに関する研究は、きょうだいあるいは保護者のみを対象として行われてきており、健常児の兄弟と障害児のきょうだいを直接比較した研究は国内ではほとんどない。そのため、きょうだいの悩みが兄弟と異なると間接的には推察できるものの、実際に、また具体的にどのように異なるのかが不明確である。そこで、きょうだいと兄弟にインタビューを行い、その経験を比較することによって、障害児のきょうだいとして生きていく特有の実態を明らかにする。それによって、兄弟姉妹に障害児がいることに特有の実態なのか、兄弟姉妹がいることの共通の実態なのかを明らかにできる。また、探索的に兄弟に対しては障害児者をどのように捉えているのかを尋ねることによって、きょうだいが抱える悩みの一端を明らかにする。

なお、本研究では、障害児を兄弟姉妹に持つきょうだいを平仮名の「きょうだい」、健常児を兄弟姉妹に持つきょうだいを漢字の「兄弟」とする。また、きょうだいからみた障害児を同胞とする。

II 研究方法

(1) 対象

障害児のきょうだい5名（女性4名男性1名）健常児の兄弟5名（女性2名男性3名）を対象にインタビュー調査を行った（表1）。

(2) インタビューの質問

障害児のきょうだいと健常児の兄弟で、同様に質問したのは「1. きょうだい（兄弟）がいることで良かったこと、嬉しかったこと（家族と学校）」、「2. きょうだい（兄弟）がいることで辛かったこと、我慢したこと（家族と学校）」、「3. 自分のきょうだいが障害児だと知った時の気持ち（きょうだい）／自分の兄弟の存在を知った時の気持ち（兄弟）」、「4. きょうだいについて話すことができる友達はいるか（きょうだい）／兄弟のことを話せる友達はいるか（兄弟）」、「5. 将来のことで何か考えていることはあるか」、「6. きょうだいがいることで自分の将来に何か影響を与えているか（特に親が年老いた後についての不安）（きょうだい）／将来のことで何か考えていることはあるか（特に自分の進路に影響を与えたか）（兄弟）」であった。

また、障害者のおかれた現状がきょうだいに影響を及ぼしているかを捉えるため、兄弟に対しては以下の質問を加えた。「7. 「障害児」についてどう思うか」「8. 障害児がいるきょうだいや家族についてどう思うか」「9. 早期診断したいか（させたいか）」。

III 結果

(1) きょうだいと兄弟の比較

インタビューの回答から障害児のきょうだいと健常児の兄弟の比較を表2に示した。

表1. きょうだい（兄弟）の属性

	回答者	対象（年齢）	きょうだい（兄弟）の 続柄（年齢）	障害名
きょうだい	A	女（21歳）	弟（17歳）	知的障害
	B	女（21歳）	妹（19歳）	知的障害
	C	男（24歳）	弟（15歳）	自閉症
	D	女（18歳）	妹（17歳）	ネコ泣き症候群
	E	女（18歳）	妹（11歳）	知的障害
兄弟	F	女（21歳）	兄（29歳）	
	G	女（21歳）	妹（16歳）	
	H	男（19歳）	妹（18歳）	
	I	男（19歳）	姉（22歳）兄（24歳）	
	J	男（21歳）	妹（13歳）	

障害児のきょうだいと健常児の兄弟の違い

表2. きょうだい（兄弟）に関するインタビューの回答の概要

	きょうだい	兄弟	
1. 良かったこと、嬉しかったこと (家族・学校)	家族	一般家庭ではできない経験ができたこと。(A, B)	親に言えない相談ができたこと。(F)
		視点、視野を広くできたこと。(B)	話し相手になること。(G)
		家族が良い意味でにぎやかだったこと。(C)	家族の雰囲気を明るくしてくれる存在であること。(H)
	学校	みんなにとって難しい子が身近にいたこと。(D)	様々なことを教えてくれたこと。(I)
		家族の仲が深まったこと。(E)	寂しくない。(J)
		同胞がいじめを受けている時に注意をしてくれたこと。(B)	迎えに来てくれたこと。(F)
2. 辛かったこと、我慢したこと (家族・学校)	家族	学校が被らなくて特になかった。(C, D)	忘れ物をしたときに貸し借りができたこと。(G)
		同胞について話した時に「え？大丈夫？」という言葉がなかったこと。(E)	自分の友達とも仲良くしていたこと。(H, I)
		数回でも思いを共感してもらえたこと。(A)	学校が被らなくて特になかった。(J)
	家族	同胞と違う扱いをされていたこと。(A, B)	仲良い分反発も多かった。(F)
		甘えられなかったこと。(A, B, D)	特にない。(G)
		家族の雰囲気が悪くなった時があったこと。(C, E)	姉だから意見が被った時は言われるわけではないが雰囲気で我慢していたこと。(H)
学校	母と対立したこと。(E)	姉の思春期の時が大変だったこと。(I)	
	友達の家族の話を聞くこと。(C, D)	妹だけ許される等の関わり方に差があったこと。(J)	
	いじめられたこと。(A)	特にない。(F, G, H, I, J)	
3. 自分のきょうだいが障害児だと知った時の気持ち／自分の兄弟の存在を知った時の気持ち	家族	きょうだいが変な子と言われたこと。(A, B)	仲良い分反発も多かった。(F)
		からかわれていたこと。(B, C)	特にない。(G)
		家に友達を呼べなくなったこと。(D)	姉だから意見が被った時は言われるわけではないが雰囲気で我慢していたこと。(H)
	学校	きょうだいについては触れないでおこうという雰囲気だったこと。(E)	姉の思春期の時が大変だったこと。(I)
		疑問だった。(A, D)	妹だけ許される等の関わり方に差があったこと。(J)
		信じられなかった。(B)	特にない。(F, G, H, I, J)
4. きょうだい（兄弟）のことを話せる友達はあるか	家族	どうしたらよいか分からなかった。(E)	喜んで面倒をみていた。(G)
		悲しかった。(C)	嬉しかった。(H, J)
		話したいと思わない。(A)	誰にでも何でも話す。(F, H, I, J)
	学校	年齢を重ねていくにつれて反応が怖くて話さなくなっていた。(B)	いるが進んで話さない。(G)
		数人はいる。(C, D)	
		話せる友達がほしい。(E)	
5. 将来のことで何か考えているか／兄弟の存在が影響を与えているか	家族	分からない。(A, B)	兄のおかげで自由にさせてもらっている。(F)
		職場を家から近いところを選んだ。(C)	きっかけになっているかもしれないが大きく影響があったかは分からない。(G, H)
		障害に関わる仕事も考えたことがあった。(D)	影響というより教えてもらうために利用している部分が多い。(I)
	学校	教師になりたい気持ちが強くなった。(E)	特に影響はない。(J)
		体力的に不安がある。(A, C)	仕事の休みの日に実家に帰って会えたらいい。(F)
		金銭的に不安がある。(B, C)	行事ごとに会えたら会いたい。(G, H, I, J)
6. 将来不安はあるか／どのような関係になりたいか	家族	支えていきたいができるか不安がある。(B)	
		お母さんがいなくなった時の同胞の想像がつかないからこそ不安がある。(E)	
		結婚したいと思った時に相手や相手の家族との関係に不安がある。(A, B, D)	

質問1. きょうだい（兄弟）がいて良かったこと、嬉しかったこと（家族・学校）

家族に同胞がいることは、きょうだいにとって、「妹がいることで、一般家庭の悩みや考えていることと違うことを考えることができた（B）」「苦労も多かったが、今では良い意味で家中にぎやかで障害児の弟がいて良かった（C）」等、健常児の兄弟ではできない貴重な経験があり、きょうだいをきっかけとして家族の仲が深まったという回答が得られた。一方、兄弟も、「寂しくなかったこともだし、誕生日になんかくれたりすることかな（J）」「話し相手がいることは楽しいかな（G）」など、兄弟の存在が心の拠り所になっていることが伺える。

学校においては、きょうだい（兄弟）が同じ学校でなかった回答を除くと、きょうだいは、「一部のみにだけ、人権の勉強の時に今までの障害児のきょうだいとしての気持ちや考えを友達に共感してもらえたことかな（A）」などの障害児のいるきょうだいの感情面に焦点が置かれていた。兄弟は、「1回だけ高3の時に忘れていったおにぎりを持ってきてくれたことかな（G）」「迎えに来てくれたり（F）」など生活面での協力について述べられた。

質問2. きょうだい（兄弟）がいて辛かったこと、我慢したこと（家族・学校）

家族に関しては、きょうだいは、「妹は手がかかるからかまってもらえなくて（D）」「自分の中で障害児と健常児では、全然違うのもわかるし、理解できないのもわかるけど、分かっても私には厳しいのに妹には許されるというのが辛くて、私には笑顔を向けてくれないのに妹には笑顔を向けていたりとかなんか比較して見ちゃった（B）」という回答が得られ、親に十分に甘えなかった気持ちや親からの関わり方の差に不満を感じていた。兄弟は、姉・兄だからということ直接的に言葉で言われなくとも、年上が我慢するような雰囲気があったことが述べられた。親からの兄弟への関わりは、きょうだい・兄弟どちらもそれぞれ違う意味ではあったがきょうだい・兄弟間の親の関わりに差を感じていたことが分かる。

次に学校に関しては、兄弟は5名とも「特にない」と答えたのに対し、きょうだいは「クラスメイトが弟の奇行を目撃した時に、その事だからかわれたこと（C）」「障害があるんだって言うとなんか避ける感じっていうかそのことには触れないでおこうみたいな感じだったことかな（E）」という回答が得られた。いじめや周りからの気遣い、兄弟とは違うという見られ方を経験したという回答が多かった。

質問3. 自分のきょうだいが障害児だと知った時の気持ち・自分の兄弟の存在を知った時の気持ち

きょうだいは、「妹は喋れないの？なんで歩けないの？って聞いてた。障害児って知った時はなんで？ってわかんなかった（D）」など5名とも戸惑いを感じていたのに対し、兄弟は喜びや当たり前の存在になっているという回答がみられた。

質問4. きょうだい（兄弟）のことを話せる友達がいるか

兄弟の方は「いるはいるけど、進んで話すことはないかな（G）」という積極的に話さない回答者もいたものの、5名とも話せる相手がいた。しかし、きょうだいは話さないと述べる回答者も2名（A, B）おり、相手がいたとしても、「小学校よりの付き合いのある数人に対しては話せるかな（C）」「きょうだいだとお互い辛さとかわかるけど、普通の兄弟だと話が通用しないんじゃないのかなって思うのもあって話せなくなったのかもしれないけど…そういう友達がいたらいいなと思う（E）」など、話せる友達の数は少なく、ほしいと感じている回答が多かった。

質問5. および質問6. 将来のことで何か考えていることはあるか／不安はあるか

きょうだいは、「分からない」という回答者が2名いた。「小学校の教師目指してて、障害の子とか不登校の子とかに手助けできるような先生になれたらいいなって思ってたんですけど…妹が障害児って知って、その気持ちが強まったかな（E）」など、残りの3名は障害児のきょうだいから影響を受けている様子だった。兄弟は、影響があったとみられる回答者は1名であった。障害児のいない兄弟にとっては、兄弟を意識して将来を考えることは少ないようだ。

また、きょうだいは、支えていきたい等の気持ちがある中5名とも金銭面や一人で見ていくことへの不安を感じていた。兄弟は、会えるときにたまに会うくらいがちょうどよいと考えていた。

(2) 障害児に対する見方

今回健常児の兄弟には、障害児や障害児のきょうだいにに対してどのようにみているかについてインタビューを行った。その結果を表3に示した。

質問7. 障害児についてどう思うか

「どうも思わないです、普通の人と同じだと思ってるよ（F）」のように普通と考える回答者が2名いた。反対に、「大変だとは思いますが、その子が幸せだったらいいと思いますかね（G）」「正直に言うと、近寄りたいたい雰囲気はある。得意じゃなかった。

表 3. 健常児から見た障害児・きょうだい

7. 障害児についてどう思うか	怖さがないわけではないが、普通の人だと思う。(F) 大変そうだと思う。(G) 障害児なのだろうとは思うけど他には何も思わない。(H) 仕方がない、しょうがないと思う。(I) いいイメージがないので、自分とは別の枠として考えている。(J)
8. 障害児がいるきょうだい、家族についてどう思うか	偏見な目はないが大変そうとは思。(F) 年をとっても親が面倒を見るという面で負担が大きく大変そう。(G) 友達にいても接し方を変えるつもりはない。(H) 周りに被害が出ないようにしっかり育ててしつけてほしい。できる限り近くにいたくない。(I) 関わり方も難しく、大人になったら特に結婚のとき大変なのだろうと思う。(J)
9. 早期診断をしたいまたはさせたいか	する (F, H) させたい (I, J) させたくない (G) (する) 障害があると知っても産みたい。旦那が反対したら離婚も考える。(H) (する) 産むか産まないかは別として覚悟や準備ができるから。(F) (させたい) 障害児にいいイメージがないから。(I) (させたい) いいイメージはないが、育てられる環境かを考えた上で決めたい。(J) (させたくない) 調べて障害があると知ったら負担を考えておろすことを考えてしまう。(G)

仕方がないのは分かっているけど…あまり良いイメージはなかった (J)」と答えている回答も見られた。

質問 8. 障害児がいるきょうだい家族についてどう思うか

「もうちょっとしっかり育ててよって思う。外にいるときは目を離さないでほしい。周りに被害を与えないようにしつけてほしい。大人しい障害者でも電車とかだったら席を3つ位あげたい (I)」というネガティブな意見もあった。また、「誰もが障害の子と生活しているわけじゃないし。大変なんじゃないかな (G)」という回答も得られた。

質問 9. 早期診断したいまたはさせたいか

女性からは、しないという回答は得られなかった。また、男性からは、させたい2名、させたくない1名であった。早期診断を判断する理由は、回答者によって大きく異なっていた。「障害児にいいイメージがない (I, J)」、「おろすことも考える (G)」といった障害児を産むことに対するネガティブな意見が早期診断の理由となっている回答者もいた。一方で、「障害があると知っても産みたい。旦那が反対したら離婚も考える。(H)」という強い意志の確認や、「育てる準備・覚悟のために (F)」として早期診断を考える回答者もいた。

IV 考察

今回の調査では、障害児のきょうだい特有の実態を明らかにすることを目的として、障害児のきょうだい、健常児のきょうだいそれぞれにインタビュー調査を実施した。その結果から、(1) 障害児のきょうだいの特有の実態、(2) 健常児からみた障害児・きょうだいに

対する見方、(3) 本研究の意義と今後の課題を述べる。

(1) 障害児のきょうだいの特有の実態

障害児のきょうだいの特有の実態について、「きょうだい (兄弟) のネガティブな経験とポジティブな経験、将来の3つを取りあげる。

まず、きょうだいのほうが、兄弟よりもネガティブな経験を語っていることが分かる。加瀬 (2008) のきょうだいに対して行われた調査では、小学生の頃あるいは現在悩みがあるというものは5割程度であったが、本研究では、きょうだい全員が何かしらネガティブな経験を語っていた。このことは、選択式の加瀬 (2008) の調査に比べ、本研究がインタビューであったため、より広い悩みが引き出されたと考えられる。加瀬 (2008) の調査が小学生時代と現在についての「悩み」質問であるのに対し、本研究は過去から現在に至るまでの「辛かった・悲しかった」質問であるという違いや、回答者の違いという可能性もあるだろう。

ネガティブな経験の中でも、特に、同胞を理由にじめやからかいを受ける、触れてはいけないという周りからの気遣いという回答 (質問 2) は、障害児のきょうだいに特有であった。このことが、同胞のことを話せる友達に関して、きょうだいではためらう者が多い (質問 4) ことにもつながっていると考えられる。加瀬 (2008) の調査においても、小学生の頃、障害のある兄弟姉妹について友達に話すという回答が45%であり、本研究の質問4の回答とほぼ一致する。さらに加瀬の調査では、話さないという回答の理由として「話してもどうせわかってもらえない」「恥ずかしい」等が挙げられていた。本研究の質問4で「話さない」と回答した者も「本当の自分を理解してもらえない」

「本当の自分を隠す」という心理が反映されている可能性がある。

今回の調査で、きょうだいは、大学生以上を対象として行ったため、大きな葛藤を経て現在は既に同胞について受け入れており、いい経験になったと考えていた。しかし、きょうだいは、同胞を受け入れている一方で、同胞のことを友達に話すことへのためらいがまだあるという回答が5名中3名いた。これは「障害は劣等である」という社会のシナリオ（山本，2005）によって、友達に話すことへのネガティブな返答、友人関係の変化に恐れたためではないかと考えられる。

また、比較によってみてきたきょうだいと兄弟の共通点としては、きょうだい（兄弟）構成によって、甘えられなかったり、我慢することがあったりと理由は違うが、大きくとらえると「親からの扱い（関わり方）の差」という同様の辛さを感じていたことが分かった。

次に、ポジティブな経験にも特有の実態を確認できる。一般家庭ではできない経験ができた（A, B）、視点・視野が広くできた（B）、思いを共感してもらえた（A）など、同胞がいるゆえの経験や、周囲の理解に対する喜びは、兄弟には見られない回答である。

最後に、将来については、兄弟では、特に影響がないと述べる者が大半であったのに対し、きょうだいは、自身では同胞の影響の有無に関して分からないと考える者（A, B）や将来の進路に影響があったと述べる者（C, D, E）もいた。同様に、将来助け合いとしての関わりが兄弟で述べられたのに対し、きょうだいは同胞のことを第一に考えている様子であった。このことは、障害児の将来についてきょうだいが親から過剰な期待（吉川，1993）を抱かれていることを表している。現段階では、親がいることによって軽減されている可能性もある。

(2) 健常児からみた障害児・きょうだい

インタビューより、健常者の障害児・きょうだいに對する見方は、「積極的拒絶」「消極的拒絶」「対等」の3種類に分けられる。具体的に、積極的拒絶としては、「しょうがない」「いいイメージがない」という言葉から自分とは別の枠と考え、障害児を同じ人としては見ていなかった。消極的拒絶は、直接的な拒否はなく、一見特有の目で見ていないようである。しかし、「大変そう」「怖さはないが…」という言葉やインタビュー時の表情から、回答者Eが感じていたような「きょうだいについては触れないでおこうという雰囲気辛さ」と重なる点がある。「対等」としては、「接し方を変えるつもりはない」と強く答えおり、障害児のきょうだいに対する平等性を示していた。

早期診断についての理由は、「覚悟」と「障害児に

對するイメージ」に分けられるが、したい（させたい）という判断が大半であった。今回、「障害児についてどう思うか」「障害児のきょうだい・家族についてどう思うか」「早期診断について」の順番でインタビューを行った。そのため、障害児について話すことで整理した上での答えだった可能性も高く、質問の順番によってまた違う結果が出ることも考えられる。

(3) 本研究の意義と今後の課題

そもそも国内における障害児・者の家族に関する研究は、母親の障害受容のプロセスやストレス、負担についての研究が中心であり、障害児・者のきょうだいであることによる体験や影響に関する研究は少ない（三原，2000）。本研究の意義としては、障害児のきょうだいに直接会い、きょうだいが抱えている思いや経験を捉えたことである。質問紙で行われた先行研究と異なり、インタビュー調査を行ったことで、より詳細な回答が得られた。

今回の調査対象は、同胞からみると年上のきょうだいのみであった。また、18歳から24歳という狭い年齢層で行った。これらのことが結果に影響した可能性も考えられる。

今回の研究からみえた課題としては、大きく分けて「環境の大切さ」「教育現場での支援」の二つである。兄弟は誰にでもどんな話でもできる回答者が多いのに対し、きょうだいは過ごしてきた環境によって話せる回答者と話せない回答者に分かれていた。山口（1968）によると、外観から捉えにくく疑似体験を行いにくい障害については、周囲からの理解や支援が得られにくい障害であるが、障害理解の授業の中ではほとんど取り上げられる機会がない。教育現場を中心として、障害に関する学びやきょうだいの思いに対する心理的支援を行っていくことが、必要である。これによって、社会からの見方が変わり、友達との関係性も変わっていくのではないかと考えられる。

今後は、本研究で明らかとなったきょうだいの特有の実態をもとに、教育現場での支援について検討する必要がある。

引用文献

- 金泉志保美・木村美沙紀・佐光恵子・松崎奈々子・高橋珠実・相京奈々子・新井淑弘（2015）障害を持つ子どもときょうだいを育てる父親の思い。群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター，32，55-63。
加瀬みずき（2008 a）障害のある兄弟姉妹がいることの影響 — 悩んだこと良かったこと。障害のある人のきょうだい

- への調査報告書（財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金），32-33.
- 加瀬みずき（2008b）障害のある兄弟姉妹がいることの影響 — 友だちとの関係. 障害のある人のきょうだいへの調査報告書（財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金），38-39.
- 川上あずさ（2013）自閉症スペクトラム障害のある児ときょうだいの関係構築. 日本小児看護学会誌，22，34-40.
- 小宮山博美・宮谷恵・小出扶美子・入江晶子・鈴木恵理子・松本かよ（2008）母親から見た在宅重症心身障害児のきょうだいに関する困りごととその対応. 日本小児看護学会誌，17，45-52.
- 三原博光（2000）障害者ときょうだい～日本・ドイツの比較調査を通して～. 学苑社
- 武田京子（1995）きょうだい関係と性格特性に関する研究. 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要，5，179-190.
- 長澤克樹（2009）発達障害児・者を兄弟姉妹に持つ「きょうだい」支援の方向性に関する探索的研究 — 成人きょうだいへのインタビューを通して —. 人間科学研究，22
- 山口洋史（1968）障害理解をすすめるために. 山口洋史・山田優一郎（編），障害をどう伝える. 文理閣，1-20.
- 山本美智代（2005）「自分のシナリオを演じる」同胞に障害のあるきょうだいの障害認識プロセス. 日本看護科学会誌，25，37-46.
- 吉川かおり（1993）発達障害者のきょうだいの意識 — 親亡き後の発達障害者の生活ときょうだいの抱える問題について. 発達障害研究，14，253-263.

謝 辞

本研究は、椋山女学園大学卒業研究を修正したものである。調査に協力して下さった方々、山田真紀先生に心より感謝申し上げます。また、貴重なご意見をくださいました堀井肇さん、石谷禎孝さん、橋本実夕さん、中北博子さんに深く感謝申し上げます。